

大学コンソーシアム京都インターンシップ・プログラム  
長期プロジェクトコース プロジェクト報告書

特定非営利活動法人 気候ネットワーク  
—炭素社会と再生可能エネルギー100%実現に向けた調査・情報発信—

矢崎葵織 山元翔馬  
2023年11月15日

## 1,はじめに

この報告書では、2023 年度インターンシップ・プログラム、長期プロジェクトコース、特定非営利活動法人気候ネットワークでのインターンシップで行った、脱炭素社会と再生可能エネルギー100%の実現に向けた調査・情報発信をするための活動の報告を目的とする。インターンシップの期間は 2023 年 6 月 15 日から 11 月 15 日の約 5 か月間で、企画立案から、パンフレットの制作までの過程を示す。

## 2,特定非営利活動法人気候ネットワークについて

気候ネットワーク様は、NGO（非政府組織）・NPO（非営利組織）・という市民の立場から活動を行っている法人で、紙面やインターネットでの情報発信、COP（Conference of Parties）への参加を行っている。京都と東京に事務所を持ち、原発も温暖化もない持続可能な社会の実現に向けて、国全体、地域全体の活動を通して人々の幸福や平和につなげる活動に取り組んでいる。

## 3,プロジェクトについて

日本は、気候変動を止めるべく脱炭素社会を目指して、2030 年に大気中の温室効果ガスを今の半分に、2050 年にはゼロを目標に掲げていう。その目標に向けてこれまで日本は、原子力発電を柱とした政策を進めてきた。しかし、これといった効果はなく温暖化は進み、原子力発電は、省エネや再生可能エネルギーの普及の妨げになった。また、原子力発電には放射性廃棄物の処理問題や、燃料のウランは輸入しなければ日本にない、という問題もある。

そこで、今回のプロジェクト「脱炭素社会と再生可能エネルギー100%の実現に向けた調査・情報発信」と合わせて気候ネットワーク様が抱える課題である、環境問題に関心がある若者が少ないという点を解決するべく、パンフレットを作成した。気候ネットワークの活動についての勉強や担当者との話し合いを重ね、私たちと同世代である大学生を中心とした若者に再生可能エネルギーの魅力を伝える内容でパンフレットを作成した。

## 4,活動内容

以下のように順序立てをし、約 5 ヶ月間で行った活動を記す。

1,情報のインプット

2,企画立案(1)

3,インプット情報の再確認

4,企画立案(2)

5,インターンシップ生との交流

6,パンフレットの作成

#### **4-1,情報のインプット**

気候ネットワーク様のこれまでの活動を知るために、6月下旬から7月の中旬にかけて4回にわたるブリーフィングを行った。はじめの3回はオンラインで実施し、4回目は京都市中京区に位置する京都事務所に訪問して行った。気候変動について議論している様子の動画も頂いたので合い間に視聴した。ブリーフィングでは、環境問題や気候変動問題の現状の理解、再生可能エネルギーの普及率、世界との比較、世界で行われている環境問題に対する運動について学んだ。

#### **4-2,企画立案(1)**

8・9月中の大学の長期休暇に向けて、7月は企画立案のための話し合いをした。私たちの同世代に感じる印象から、気候変動への実感があまりないこと、自分に対してメリットがないと興味を示しにくいこと、デモンストレーションやイベントでは人が集まらないことなど、意見を出し合った。そこで、気候変動について知ってもらいことと、対策するには身近で何ができるのか調べ、まとめた内容をポスターにしようと企画した。気候変動の対策になることが自分にとってメリットのある内容だと興味をもって行動に起こしやすいと考えた。具体的な内容は、プロジェクト名である脱炭素社会から、焼却によって二酸化炭素を排出するごみを減らすことが効果的だと考えたことから、ごみを出さない製品・企業の紹介することと、気候変動の恐ろしさを知ってもらうというものである。しかし、気候ネットワーク様にこの企画を提案と相談したところ、再生可能エネルギー100%つながる企画ではないということに気づかされ、より効果の高い企画のためにもう一度、考え直すこととなった。

#### 4-3,インプットした情報の再確認

8月11日私たちは再度、気候ネットワーク様の京都事務所に訪問し、より効果の高い企画の立案に向けて気候ネットワーク様の活動をこれまでに制作された再生可能エネルギーに関するパンフレットをもとに理解を深めた。気候ネットワーク様の目指す脱炭素社会は再生可能エネルギー100%であること、再生可能エネルギーの印象をプラスにとらえてもらうこと、日本が掲げている温室効果ガスを減らす目標が2030年で今の半分、2050年にゼロすることであることを改めて理解する時間となった。

#### 4-4,企画立案(2)

情報の理解を深め、私たちが同世代に伝えたい内容は、1人1人の行動だけでは日本の掲げる目標にたどり着けないということ、地域などの団体で再生可能エネルギーについて考えてほしいこと、義務ととらえずにシステムの変化につながる行動を促す内容であることへと変化した。また、ポスターでは伝えたい内容が載せきれないと判断をし、パンフレットの作成に変更した。

また、8月の事務所に訪問した際に、今まで制作した再生可能エネルギーに関するパンフレットがあまり多くの人の手に渡っていないということを知り、今までのパンフレットを活用して、私たちのパンフレットを制作することとなった。

#### 4-5 インターンシップ生との交流

9月5日気候ネットワーク様の事務所にて、気候ネットワーク様にお世話になっているコンソーシアム以外のインターンシップ生の方と交流をした。各々が行っている活動内容の発表やアイスブレイクを通しての意見交換を行った。その時私たちは、制作したパンフレットをどのようにして発信するか悩んでおり、情報発信の手段として気候ネットワーク様が運用するブログがあること、ラジオの出演も可能であるということを知った。

#### 4-6 パンフレットの作成

気候ネットワーク様から頂いた再生可能エネルギーに関するパンフレットをしっかりと読み込むことから始まった。参考にしたパンフレットは「太陽光発電のギモン解決 よくある質問15選」、「農地から食料とエネルギーの未来を ソーラーシェアリング」、「気候アクションガイド」の3つである。この3つのパンフレットのから、私たちが関心を持った部分を抜き出し、加えて気候ネットワーク様から感想と考えも制作するパンフレットに入れてほしいとのことだったので、まずは文にまとめることから始めた。頂いたパンフレットには太陽光発電についてのものしかなく、風力発電については気候ネットワーク様に相談をし、私たちが調べてまとめ、それを添削して頂き、作成するパンフレットに加えることにした。ページごとに使用するパンフレット分けて、使われている部分には表紙の画像と電子版が読めるQRコードを合わせて載せることで興味を持った内容に対してすぐに参考した

資料を見ることが出来る工夫をした。

次に、まとめたものをデザインに落とし込んでいく。はじめは、1 ページを横に 2 つに分けて、上に関心を持った部分、下に感想と考えというふうにしていった。しかし、文字だけの殺風景なものになってしまった。また、感想と考えが書かれているところの小見出しをどうすれば大学で書くレポート感がぬぐえるのか改善するところが明確になった。気候ネットワーク様に相談し、キャラクター同士での会話の形式にするとレポート感はぬぐえるのではないかというアドバイスを頂いた。アドバイスを参考に、先生と生徒のキャラクターを登場させ、先生には頂いたパンフレットから抜き取った部分を、生徒には私たちの分身となり感想や考えを話してもらうことにした。

パンフレットを作成するにあたり、文字、キャラクターの大きさをそろえる、余白をそろえる、イラストなどを入れてページごとに動きを見せる、目次、ページ数、フォントなど見やすさ、読みやすさを意識することができた。作成途中で気候ネットワーク様に確認して頂いたとき、なぜこのパンフレットを作成しようと思ったのか、再生可能エネルギーがなぜ良いのかという部分があった方がより、キャラクターの会話がわかりやすくなるというアドバイスを頂いたので、前書きを付け加えた。表紙のデザイン、パンフレットのタイトルを考えるのに苦戦した。プラスの印象を持ってもらうためにどんな言葉が似合うのか試行錯誤をして、「自然エネルギー いいね!」というタイトルになった。SNS でのグットボタンを押す感覚で読んでほしいという思いを込めた。表紙、裏表紙合わせて計 8 ページのパンフレットとなった。

## 5.成果

9 月ごろに作成し始めたパンフレットだったが、11 月 11 日の最終講義で行われたプログラム・プレゼンテーションに間に合わせる事が出来ず、配布をして反応を見ることが出来ないという結果になった。そんな中で評価できる点は、このプロジェクトに対しての企画内容の妥当性が高いこと、作成したパンフレットは、私たちの身近な人やコンソーシアムで他のプロジェクトを行っていたインターンシップ生に配布することは決まっているので、1 人でも多くの人に興味を持ってもらえる可能性をまだ残している点である。また、インターンシップを行った私たちが、環境について意識するようになったことも成果と言える。大学ではこのような分野を専門的に学んでいなかったもので、専門外の内容にも理解が深まること、専門分野の視野を広げてくれることとなった。

## 6.反省点

1 点目は気候ネットワーク様の活動の理解が浅かったことである。気候ネットワーク様の活動の理解度については、途中で企画内容を変更して、プロジェクトの活動のスタートが遅

れたことから分かるように難しいプロジェクトの内容から焦ってしまったところがある。気候ネットワーク様とのブリーフィングの際に、もらった情報をかみ砕くことに時間をかけてしまい疑問点など、こちらから発信する言葉が少なかったことも理解度の低さに表れてしまった。

2点目はスケジュール管理の甘さである。スタートが遅れたことに加えて私たち2人のコミュニケーション不足が原因であると考え。互いの考えがずれたまま進めてしまったので一度止まって、歩幅合わせることに時間をかけてしまった。細かい報告、連絡、相談があればもう少しスムーズに事を進めることが出来たと考える。悩んでいることや不安な点をもっと口にしていれば良かったと反省している。初めての挑戦が多く、戸惑うことは当たり前であること、はじめましての人とプロジェクトをするには緊張感や難しさがあり、その空気をどう楽しむかによって成果物の大きさは変わることを実感した。

3点目は、コンソーシアムの他のプロジェクトのインターンシップ生の活動内容を聞いて私たちと比べてしまったことにある。良いところは参考にして気候ネットワーク様に提案するなど私たちでいくらでもよい方に持っていくことが出来たにも関わらず逆に、消極的になってしまったところを反省している。以上の3点から私たちに何が足りていないのか改善点が明確になった。この経験は今後活かしたいと考える。

## 7.全体を通して

このプロジェクトが始まる前に5ヶ月という長い期間でどのようなことが出来るのか、想像を膨らませていたが、思ったよりも時間は短く、あっという間に終わってしまった。私たちの行うプロジェクトは、気候ネットワーク様の目指すところを考えるとほんの小さな一歩にも満たない、踏み出すための足を上げる動作に過ぎないということを実感した。当初は、気候ネットワーク様に影響を与えるほど効果的で大きな成果を出したいという気持ちだった。けれど、その実現はこの5ヶ月間では短すぎることに、私たちの「こうしたい」という気持ちを実現させるには多くの人の協力と時間が必要だということが分かった。そして、新しいものを提案するという考え方よりも、今あるものをもっと良くするというように考えた方が、より良いプロジェクト活動になると感じた。気候ネットワーク様には、気候変動についてだけでなく、人として社会人として成長できる、機会を頂いた。

## 8.最後に

このプロジェクトを達成できたのは、特定非営利活動法人気候ネットワーク、田浦健朗さんと菅原怜さん、コーディネーターの桜沢隆哉先生、大学コンソーシアム京都、事務局の皆さんのおかげです。この場を借りて感謝の気持ちを表明いたします。